

# 薬剤部

薬剤部長 仲鉢 英夫

## 薬剤部の展望と実績

2014年の薬剤部は大きな変革を始める1年になりました。外来処方、院外処方せんへの切り替え、救命救急領域への常駐、症例検討勉強会の開始、学会での年間10演題以上の発表などです。薬学教育6年制課程を修了した薬剤師を迎え入れ3年目となりましたが、臨床能力、問題解決能力、コミュニケーション能力を持った患者貢献のできる臨床薬剤師への社会的ニーズに応えきれない現状を打破していくためへの方略であります。

院外処方せんへの移行は非常に大きなチャレンジでありチャンスでもありました。神奈川県の実薬分業率は全国でも上位であり、逆紹介率を向上させる必要があった本院としては院外処方へ移行し、「かかりつけ薬局」を患者さんに作って頂くことが必要と考えました。また病院機能の専門性が高くなる中、入院患者さんへの薬物治療も複雑となり危険性も高まってきていました。薬剤部として医薬品の安全性を維持していくことは責務であり、回診やカンファレンスへの参加に業務をシフトし、医薬品の適正使用への取り組みに更に貢献することを目標としました。その一つの取り組みとして、ICU回診への参加、腎臓病患者への回診参加などがあります。

また、2014年の改正薬剤師法で、情報提供の義務だけでなく、指導し記録することが義務化されました。これは医師が患者へ説明指導することと同等の扱いとなり、責任がより大きなものになったことの証明であります。薬歴と副作用情報などの完全な把握、医薬品情報の有効な利用、薬物投与前の徹底した安全性の確認、持参薬のチェック、積極な処方提案などの処方前からの総合的な薬学的ケアと同様に、指導教育し適切な使用を進めていきます。

教育の面では、ファーマシューティカルケア（患者のQOLを向上させる確実な結果を目的とした責任あ

る薬物治療の提供）の実践を目指し、症例検討勉強会を開始しました。これは毎月テーマを設定し、基礎勉強会と症例検討の2部構成であり、若手教育の場ではありますが、経験年数の長い薬剤師も共に学ぶ体制で行っております。またこの内容をWebにて離島僻地のグループ病院へも配信しており、学ぶ機会が少ない地域また症例の少ない地域の薬剤師としてのスキル均てん化を図れればと考えています。

## 2014年業務量

薬剤管理指導件数	24,568件／年 (月平均 2,047件)
総指導件数	33,561件／年 (月平均 2,797件)
外来処方箋枚数	142,764枚／年 (月平均 11,897枚)
入院処方箋枚数	1076,929枚／年 (月平均 8,910枚)
注射薬払い出し本数	589,508本／年 (月平均 49,126本)
外来化学療法加算	4,111件／年 (月平均 342件)

## 2014年学術業績

### 学会発表

1. 萬淳史, 小野祐太郎, 若林奈々, 三好良太郎, 坂井かつ江, 大澤栄子, 佐藤守彦: 湘南鎌倉総合病院の新型インフルエンザ想定訓練について. 第29回日本環境感染症総会, 東京, 2014, 2.
2. 萬淳史, 小野祐太郎, 若林奈々, 三好良太郎, 坂井かつ江, 大澤栄子, 佐藤守彦: 当院職員におけるインフルエンザ接種率改善への試み. 第29回日本環境感染症総会, 東京, 2014, 2.
3. 宮崎奈緒子, 魚嶋晴紀, 小澤康久, 国原いづみ,

- 賀古眞：肝不全用経腸栄養剤投与後の上部内視鏡検査への影響．第29回日本静脈経腸栄養学会学術集会，横浜，2014，2.
4. 藤村一軌，仲鉢英夫，久保田聡，西口翔：高齢者を対象とした急性期総合病院におけるジゴキシン血中濃度の実態調査と至適投与量の検討．第5回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，岡山，2014，5.
  5. 星吉行，小澤康久，小松哲哉，仲鉢英夫，堂本佳典，大淵尚：研修医の薬剤適正使用に向けたERカンファレンスにおける薬剤師の取り組み．第5回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，岡山，2014年，5月.
  6. 萬淳史，藤村一軌，佐藤守彦：湘南鎌倉総合病院におけるBacteroides属の感受性についての調査．第62回日本化学療法学会総会，福岡，2014年，6.
  7. 藤村一軌，萬淳史，佐藤守彦：抗菌薬届出制度の運用変更による使用状況の変化．第62回日本化学療法学会総会，福岡，2014，6.
  8. 小澤康久，橋本貴広，仲鉢英夫：業務開始時間の変更による薬剤インシデント・アクシデントと睡眠の影響．第39回日本睡眠学会定期学術集会，徳島，2014，7.
  9. 仲鉢英夫，簗島隆仁：リファンピシン肝障害に対する減感作療法により治療継続が成功した1例．第24回日本医療薬学会，愛知，2014，9.
  10. 山下敦哉，小澤康久，仲鉢英夫：医師への継続的な情報提供による処方インシデントの変化．第24回日本医療薬学会年会，愛知，2014，9.
  11. 澤康久，榎藤学司，田中江里，田中正史，巽一郎，北川泉，大竹剛靖，山下理絵，下山ライ，仲鉢英夫：トラマドール・アセトアミノフェン配合剤におけるCYP2D6阻害作用をもつ薬剤の影響．第8回緩和医療薬学会年会，愛媛，2014，10.

#### 徳洲会研究会 講演・発表

1. 仲鉢英夫：JCIについて．第1回徳洲会九州・奄美・沖縄ブロック薬剤部臨床業務研究会，福岡，2014，2.
2. 久保田聡：GTT（Global Trigger Tool）を用いた薬物有害事象の分析．第1回徳洲会九州・奄美・沖縄ブロック薬剤部臨床業務研究会，福岡，2014，2.
3. 東地智子：研修医の薬剤適正使用にむけたERカンファレンスにおける薬剤師の取り組み．第18回徳洲会東日本臨床業務研究会，千葉，2014，6.
4. 大塚秀人：当院におけるインフルエンザ治療の薬剤選択について．第18回徳洲会東日本臨床業務研究会，千葉，2014，6.
5. 齋藤佳苗：当院でのダパグリフロジン使用状況．第19回徳洲会東日本糖尿病研究会，東京，2014，11.
6. 齋藤佳苗：糖尿病について．関東ブロック薬局勉強会，神奈川，2014，12.